保育エッセイ

子どもたちの「現（いま）在」を考える④

「いま保育者である人」が「いま子どもである人」に対する不可避の「責務」とは？

本田和子
（児童学者）

「いま大人である人」の責任

「いま大人である人」は、「いま子どもである人」に対して、避けることのできない責任を負うている。彼らが人として成長するために、ふさわしい環境を整え、必要な人やものを用意し、彼らが喜ぶこと・望むことをかなえるべく、あらゆる支援を惜しんではならないのである。

なぜなら、その理由は簡単である。「いま大人である人たち」が、「いま子どもである人たち」を産出し、それに「次の世代」という名前を与えて、未来を担わせる役割を与えてしまったからである。個々人が「わが子」という名の「幼い者」を産出するか否かは問題ではない。私たちが、他の生物と異なり、「社会」とか「国家」というものをつくり出し、そのアイデンティティーの確立のために「伝統」などいうものを考え出してしまった以上

本田和子（ほんだまさこ）
児童学者。お茶の水女子大学元学長、名誉教授。
『異文化としての子ども』『子ども100年のエポック』
『それでも子どもは減っていく』など著書多数。

は、それを継ぐものが必要となる。「次の世代」は、子の親たるか否かを越えて、すべての人に必要となったのである。

生物は、一般に、「自己複製系」であるとされている。しかも、ゲノムという点で見る限りは、生物は、常に唯一無二の個を産み出す「自己創出系」であると言わねばならない。ゲノムは極めて利己的であって、自己の遺伝情報の保持継承には熱心であるが、種族の保存などには興味がないと言われる。雄のライオンは、自身の子孫の保存のためには、他の雄の精子による子ライオンなど食い殺してしまうとされているが、この現象など、その端的な証しと言えよう。

しかし、人間は、これら他の生物との間に一線を画した。「家族」「社会」などいう集団を定立し、さらには、「国家」などいう、より大きな人為的な装置をも必要とするかに定立してしまった。おそらくは、人の知力と技術力が産み出した「文化なるもの」が、人が単一の個人として生きることを不可能にしてしまったのでもあろうか。

従って、私たちが保持し伝達しようとするのは、「個の遺伝情報」だけでなく、「種にかかわるそれ」、より狭義に現実的に言うなら、「民族の遺伝」、取りあえずは「日本人のそれ」と言えるかもしれない。「取りあえず」と条件を付けたのは、国家や民族の概念もいずれ変わることもあろうし、その場合は、より広やかなまとまりで「次世代に託すべきもの」が考えられるかもしれないからである。

いずれにせよ、私たちは「子ども」をつくり出し、それを「次の世代」と位置付けている。となれば、私たちは、彼らの存在意義と彼らの価値を改めて認識し、彼らが人として

成長するための制度やそれを支える財政に関して、さらには必要とされる労力に関しても、彼らに寄り添ったあらゆる支援を惜しんではなるまい。

「いま保育者である人」の責務

「産み育てる」責任は、すべての大人が分け持つものだとして、具体的に己の身体を駆使してその営みに従事するのは「いま保育者である人」の責務であろう。とりわけ、幼稚園・保育所、あるいはこども園など、「プロの保育者」と呼ばれる人の役割は大きい。

社会文化の急激な変貌を受けて、子どもの生育環境も時々刻々変化し続けている。彼らの成長の場も、そこに提供される人やものも、先述のように変化し続けていくことは言を俟(ま)たない。しかし、これら成長要因の変化にもかかわらず、幼児の世界には、そして幼児保育の現場には、「変わり得べくもないもの」が存在している。例えば、一人ひとりの「多様な現在(いま)」に即応すること、身体の動き・表情・言葉など「あらゆる表現媒体」を通して彼らが発信するものを受け入れること、さらには、子ども相互、あるいは子どもと大人の間に結ばれる「多様な仲間づくり」に留意することなど、保育の世界が大切にしてきた原則は変わりようがないはずであろう。

ただ、これら「変わり得べくもない原則」とともに、変わり続ける社会文化の多様性に対応して、従来に増して強調されねばならないものが出現することも確かである。その一つとして挙げられるのが、「多様性と変化」に即応し、保育現場に発生する「多様性と変化」の中で子どもたちとそれを分かち合うことではないか。

幼い人たちの日常は、突発事に災いされることのない穏やかなものであることが望まれるが、ただし、それは、「多様性」と「異質性」を包み込んだ穏やかさであるべきであろう。現に、いま子どもたちは、異文化に育ったがゆえに、言葉も振る舞いようも異にし、価値観も異なる人々との共生を余儀なくされたり、障害を持つゆえに、発達の度合いも行動様式もさまざまな仲間たちと、共に暮らすことをあたりまえとされている。多少の波風は立つかもしれないが、究極的には平穏な日々……。多様性も異質性も、幼い子どもにとってはあたりまえの日常に過ぎないのかもしれない。何しろ、日々、新しい事態に遭遇し、新しくなった自分を引き受けねばならない彼らにとって、異質の他者との共生など、取り立てて問題視することではないと言うべきだろうか。

国と国との距離は短縮の一途をたどり、国境線も日増しに薄くなりつつある今日、幼児期のこの特性、すなわち、多様性に富み、異質のものをこだわりなく受け入れるこの特性は、将来を見据えても特記さるべき重要事と言うべきではないか。そして、近代化の効率主義と相まって、とかく一律・画一的に運営されてきた学校教育の中で、幼児保育の持つこの特性は、他に一歩を先んじた誇るに値するものと自負さるべきであろう。激変する環境下にあって、「変わり得ぬもの」として保持されるべき具体的特性中の「変化」要因は、この時、日々変化し続ける社会文化の動向と、鮮やかに重なり合うのである。

—終わり—